冠婚大和抽法

下

和名抄云大和国葛上
加豆良岐　葛下加豆良木
乃加美　乃之毛
式条伊勢物語のを二
きかとめきてかきつけ

むの一やまとの国のつきせぬ歌ども次
第不同　とんなるたりけ女ぞのうち
いとはしたなくいろ思ひの八一を
もむかせいとはしたなくなりぬれは思
ふにつけてひくかきりなしく思ひなのう
めをまうけたりけるその名八高しる
如ふたりたりけるさとり一はもくねと
いたくいとうしいとうしと身のさうく
いとはしとよさ野なりかくにきハ
一きかのよまひてきこれいこの女い

貧

裝束



宮曜文庫

折ふしひとりの下
女の者いふ事あるべし

ところのまゝにゐてかくかみにあり
居
なまとみに行てなまめかしくも見えしかなを
あれハいとあはれとおもひたまへこちに
しかきりなくゆきてこゝろうく
思ふとしのころにすみなれたるとまり
なんと思ふ夜も行ぬといひけれハわか
このくあたらしき銭ねりしまくらと
見ゆるをやあらんさらさらをれは
うしむることいふなれむすめらう
ちかくのひとさえしさこへいくを

万葉巻一云
海底奥津白波立田山何時鹿越奈武妹之當見武

見えて前栽の中にかくれて男や
くるやとみれハはしにいでゝ月を
いとゝしうながめきにみのく
梳
いまつかきしてもをまほくかくふま
搔
てゆきていもかきうちなげきて
なかのめふれハ人まつものとかんがふに
ばかりの人おもふさまにいひける
古今雑下
風ふけハ沖つ白浪たつた山
伊物
よはにや君がひとりこゆらん
とよみけれハかのうへを思ひやるを

和名抄云金梳 俗云賀奈加利
新撰万葉巻上云
人緒念心之織者身緒
曽焼烟立砥者不見
物幹云々
ふてほ
ぬくるといつはもの尾筆
物語云あるいはつまを
わくハつのうらふふを
しとのまくうふて
ありし云々

わりつふいとゝのめりうちぬはいまの
めみちあみて玉田山にくそていくく道行
なの女をあてまうるかくそ打んとうちれハ
此女おうきくふてこの私すよまるを
へくむねふなん思ふあさたるあやし
にのふもるふみのあらんとて打くるされ
ハ此女のあつ田ふる事きうぬれハ湯ふてつ 熱湯
又多といふこ俄ふいとの私くもえまし
出くいの私みこゝちし扨ハかくハし
給ふそそといむくこの事いときくあん

はやう
桐壺巻て云部もうけ
ふつきとりひておかさき
云ふも云く伊ふもいう
はゝましく
帚木巻云衣ぬるを
かくしおとしても
そはかくつまに
ふまきうるハしかく
て云ことと云の今也
さあのえ
あいまあハ
かいまくとにいつ体所で
をくらかうていてえ
こととさきひてやうしき
ここくえ去といふ所の
古今集の俳くても清ハ
おのつからかくらう

給ふくらかくそおつもさしふめのて
櫛のみふたりさこのくく目ねわかく
毎くわもひやるやうはすれきこの櫛
是ハ女みちかくすいへしきるのなすゝ
たるとかくいのぬとにのふ見ゆらんとてひ
出くるて女のかうはきゆみうたりえし
くいのきまつ櫛をハつまくそ為で来たりう けぬ結ふ 許
さてこのいまあハあみてよくそ刀くへおといて
あやしききよみなるきみとききくおかれ桜を
つゝくしふさしのつくとるまきてつの

面櫛

て用ひなせり
はゝくし
明何云大猿と頬猿
ふさしてやふやさ猿に
ふさハやさしと那ゆよそ八
てゆらひのほとふさし
うくとハかるやしさ
きふなるまゝふ
まふるまゝふ肉いら
まして伺ってをりそ
いのはなまし之
ならの帝
おもうせて八平城帝と
やまとし此条八万葉集
巻十六云或曰昔有三男
同娉一女也云々遂乃仿
偟池上沈没水底於時
其壮士等不勝哀頽之
至各陳所心作歌三首
娘子字曰鬘兒也 無耳之池羊蹄
恨之吾妹兒之来乍潜者

いにしへをしのふたるはいとゝしとおもひてすなほに
たてまつりいはひ事にたてまつり此男ハおもふことありて
昔ならの帝につかうまつるうねめ有（王孫 采女）
て顔かたちいみしう清らにて人々よはひ
殿上人なともよはひけれとあはさりけ
りそのあはぬ心は帝をかきりなくめてたき
ものになん思ひたてまつりける帝めして
さてのち又もめさゝりけれハかきりなく
うしと思ひけりよるひるこゝろにかゝりておほえ
く侘しうおもほしくれ[illegible]ひけり

水波将涸云々此おもと
ゆゑにて作らるゝぬる
しるまてたゝえの
帝ら不知つる帝
とうつくし倭悩發
巻二云采女ノ身ナクル
事大同ノ帝ノ時ナラハ
此京也而夜倫ニ出テ大
和ノ猿澤池マテ不可行
此京此無大河哉云々此条
こゝまゝふ時代とゝく
て作らるゝおかくうし
ことゝかく論まるハやしか
しく丸ら奈良の朝の人
ゆて奏雲中ふ死を
かなのことハ時代
いくとのり
うけめ
氏ことふなるよし
ふことくり 令
切なるとて

帝ハめしゝかとことゝもおほさすさすかに
つねにハ見えたてまつる猶世にふましき心ちしけれハ
よるみそかに出て猿沢の池に身をなけてけり
かくなけつとも帝ハえしろしめさゝりけるを
ことのついてありて人の奏しけれハ
きこしめしてけりいといたう哀かり給ひて
池のほとりにおほみゆきし給ひて人々に
歌よませ給ふかきのもとの人丸

秋哀
わきもこかねくたれ髪をさる沢乃
池のたまもと見るそかなしき

此歌　ふりもおなじ
詞ひとつにあり二つの
詞といふ字は心あるにも
まどはあやまりぞ
ます
古今集上　伊勢
うつろふなき山里の
さくらの心かの花をみん
ねさそふよりしほる
と同しくいさゝの下
去のことあり
立田川
古今に八二首とあり
よみ人しらずとありて
奈良の帝の御歌のとそのこ
いふ人丸のいへるいふごく
ようからゝ知られず
うち又は人の此御歌かよ
みて奉れるなる

とよあが時ありしこの歌
六
さるさはの池もつらしなわぎもこが
たまもかつかは水そひなまし
とよみ給ひけるとさて此池（のほとりに）はかのせ（墓）
さも給ひてたまへるせおくしまし
たるはかなき
おもひこそたつた川のもみちはよりもおもし
ろきてよ御縁しけるは人丸（ならの帝）
古秋下　拾冬　六
たつた川もみちはながる神なびの
みむろの山にしくれふるらし

いひて
和名抄にはいくへれ
新古今雑下　おほ大おほきみ
うちのくれいひてしのぶ
はくそしらねなきて
しておつるのは　ふしき
皆もくの
帝のつのりなきに
きせ給ふ御製ふし
たまひて
ものみなふ

みかの歌
古秋下　六
たつた川もみぢみだれてながるめり（ちりみだれて　六）
わたらば錦中やたえなむ
とあそばしたるなる
おほ帝かりにいで給ひしに（狩）
たまふところにさすらひのこゝろをわすれぬまゝ
はれなる御製なくかしこのよし申されは
みかどおほしめしける御製ふし給ひたち
御ともにいでてよなんはいと給ひたるそれ
ものゝふにかゝるあつかひのしまは

寒るつこの木葉ふあ
つのうつこのうまうえ

ふつのうふあるん
今り信ふもいつふく
ひくもも野辺ふとく
る浜のうくゆて居
同一うえ

ふくく

牛元約束ふ下云浜の
もてうかくやひあなれ
云くかくくくくく
やハあくくまき云
相変実云世の中のタ
ともおりはてうやう
ふ知らもてくくく
しきわさん云まか
約束ふふいくおわき
浜ん空色のくくく
しきおて約のゆくく
あるやうのさんとく

うせうるよくく球奏くく孤ふ何ふこのと
物ものくくまハやを浜きくく名くつけぬく
やあうんとうまくくくく孤ふくく松も
てとのくくまもうせ孤うてものふ方
はもて あるくくとおくくあるあち
ふうやふ新ふあうぬもちくくかくく
くまるくくいまハのうくくけうんのれ
ちうあるくく孤ふくくいのれ
しうくうんなるのおくせうくく孤
うぬとうくくくく孤何ふこのれ

麻守倍伊呂布賀久
尓保比多理尓利群臣
俱称万歳之、

続後拾秋上
六

同

六

あるまゝにわたりて見たりし景
色を西にして
ふるまゝにとき
を見ぬまおそう
後ゝと見ひく
なるきらを礼八男

古今雑下

六

なのこゝろ和ゆつけるかゝる
なのゆゑ
しらぬ海にねをさそふのゝ

あるまゝ
和名抄云障泥和名阿不利

ゆゑつける
掛ふ新手ふふ白鶏
をそてまつることあれ
白き鶏といつるを
ゆゑ白き鶏をれい
袖中抄の説ハいの
後ふせて鶏の名
もう初る八枕詞
をそうく
時をしてはふくて

くをとりも和名抄
をそうとそ
古今夏

流人ふ知

あしひきの山ほとゝ
きすをそうくてれ
こゝろをとゝねをのゝ
をそうく

ゆくすゑ
きをぬるとゝやをく
如
たんとをとゝいくあさまをを
みすの古納云のむをめいをつく
うくもをひをりたるを帝て
をらんをとゝかつき孤う家る敵ふ
ちのうつのうまつりけるとゝねをて
てをたる人いのくかんたんけむをめを
あんたつを新のるちのいをうをつをたな
るをとゝくをとゝゆのるわをたんふ

うとゝねて
古八五位已上の長男
を内舎人ゝ二男を
大舎人よりつ八世
ゝ藏るあふいをハ
ねのはさくあ古納云
いあのをとをたるく
かゝうくるをとゝう

かるくさるひるいとひ〜く病て
かるくおるくたれハせもふゆくさん
ゐきるやんあるといひとうたれは
あや〜ゆうるといひくせうたると
さるふんまくゆくるくおくき
いるきくくふのそくくちのくゆる
くいくんひるくくふくくいた
うるあきのおなたのの山といわふ
いるをゆくるくさの女をるく
さくふ出つ物るくあくきうくは

切

不意

きくさ〜目をるくる俗字わ山男
いぬれハたくひるるかのもくを山ち
ゆふるれハのきくれく俗〜かる
ゐるかふほくふくみふたる山男
物もあふ出〜たるまふくのるさ
るれハ行俗くくを山の井ふい戈
くのくとくれハわのある〜かくるも
ひのくんあや〜きくやくふ女ふ行猪し
なくれハ新のなるくあらんやくも志ち
てあるたくふにくのふくれハくおそ

孕

百二

ちくくれ新
和名抄云陸奥國安積阿佐加

万葉巻十六
安積香山影副所見
山井之浅心乎吾念莫
國さかえといはゝこのうゝく侍りまゝけ
しもり

六

あさかの山のけさゝゆる山のゐ
ぬくそひとゝなりにしかはりみそのゝハ
ゝとゝくゝまふのきつたくいるきそも
しふ事なき男のなとをもたくそも
きくしまくもきたれハいとわさま
しくはしたひ事なる山の井なるこゝを
あくゝゆりきゝこれを思ひ死てかゝ
いらふせたくしふたり世のゐれ

さらしな
和名抄云信濃国更
級佐良志奈云
とゝく
和名抄云伯母和名乎波
叔母和名同上云おゝの
うゝゐて祖母のゐゝと
きゝる説合ゝ考へハ
老かゝりてゐふゝ
みてゐていゝゝ老ゝ
ゝくまふのゐれ姨ふ
てハ仮つゝ用ゐたゝ
ゝひて祖母といふゐあ
ゝきて和名抄ふ父之姉
妹為姑云阿叔母和名同上
又姨母姉妹也ゐゝあ
ゐて母のゐねふん
ふハいゝく老てゐゝゐ
ゐゝゐ仮つゝゐの

さゝふたなんゐたゝゐ
ゝきゝなといふ不男
ゝ仮たゝわのきゝ時ふおやゝふたれハ
とはなん釈のこゝくゝわのくゝゐ
あひそひくゝあるゝ妻ゝゝのいとゝろ
うきことおゝくゝゝ姑ゝとあのおん
このまわゐるふをゝふ將ゝゆく男に
もゝのをゝのゝんのさゝれくゝ何きゐ
とゝひきゝせたれを恋のゝのゝくゝ
もあゝたおゐゐのあゐふことおゐくゝを

のこりなれハ之きのいまをひかくしなれる
しく年こころ物
後拾遺雜四云
義忠朝臣あひしる
世の妹なる女ゆまく
もこしうつ行くを
を作てつかハす
東海道つ
まこしろ山をとゝ行
山の月ハこゝよりも
らしふとゝ月ハ
ふるこゝ
とう
家代雜六
東三条院詮子
われつむこ
ふるこふるとなる
のこのこまつとこの
そひく
ところきこゝて
不逢恋あるこゝ世ハ

そのこあふ所ゆきこゝ世とこいこゝに
う老こふこゝ
世あ不世こゝ
世ひこゝよ
ものこぬる我いひつこて
いゆこく海きやまふこてこゝひと
のこ世あこれハせあこれ後こさこてん
とこひかう月おいこあきゆおこれ
おこもいさこゝちふこふとき業これ
ゆこんをなこんといひこれハかゆあく
よこひく
被脊負
おこれふこゝ世のふを

きこゝうふこゝふ
海こ月ひこうこゝハ
俗ふりふここ
こゝひよ
縁ゆよの方後こゝろ
のこのこふのこふ
ゆこゝ
和名抄云姬和名於無奈老
女之称也云
いさ後
これこゝかふ後後
のここゝあふ老云さ
こよこゝき後こ
ゆこくひこふ後ひこ
もこゝふこふつこき
こゝとのここふこ
や
夕新老云云ひふ
後ひてやここゆこ
ゆこくふひこゝ
て云こゝふこゝ

みこゝこれハこやまにこゝ
ひこゝき心の岩のおこゝふ
おきこゝゆけこ
ゆこくあふ
こここここここかく
こここ和のここやこゆ
こはれここ
はくあひこひふこれハ如こくあこ
こここのふひ
おかこゝ月こいこのきこ
なくあこここをこのあくあひ
ここいみあこ
こゝ世こ無こくあこれハ

をはすて山
後世よりの名なりとハ
冠山といふとハ冠の
嶽といひしといへる
ところの説に見え
たり

かくよみたりける

六

古今雑上
わか心なくさめかねつさらしなや
をはすて山にてる月をみて
とよみてなんまたいきてむかへもてきにける
それよりのちなんをはすて山といひ
けるなくさめかたしとはこれかよしに
なんありける
しもつけの国にをとこ女すみわたりけり
としころすみけるほとにをとこめまうけて
心かはりはてゝこの家にありける物と
もをいまのめのかりかきはこひもて
いく心うしとおもへとなほまかせ
てみけりちりはかりの物ものこさす
みなもていぬたゝのこりたるもの
はむまふねのみなんありけるそれ
をこの男の従者まかちといひけるわらは
をつかひけるしてこのふねをさへとりに
おこせたりこのわらはに女のいひける
きむちもいまはこゝにみえしかしなと
いひけれはなとてかさふらはさらんぬし

むまふね
和名抄云槽 和名字 舟同 馬
槽也

きんち
ことめのそこいにのふ
うつしきゐのゆゑ
まなりきむちハ
汝といふをなれは
このいふとなれり

くらゐ云こゝ世いつふ
はる

よる
云ふ以上世ふ有く世
ゐ云こゝ以上世ゐ
世の中ふさるゐ有
よゐ一きこゝあくる
詞こゝ伝ふ人一てきつ
とゝとゝいつふ同一

後拾遺雜二
清少納言

よとこゝあてとうの
京ねこゝろ一こゝよ
ふゐ一ふ後の涙ゆる
さ一

このきふるひ
かきこゝ一ひく同一
くこゝ伝ゆこゝいつふ
一こゝれの一
されの一ゐて伝イ

きまこゝいつよ同一
あつ一めきて
寄恋秋　俊伝
大納言の君の君きる
いつ一こゝよ年一の
ふゐふあの一めれ
せて伝よるきめも
ゐこゝ伝いつる同

おくをゆこゝさみ一ひきんなのいひそう
女ぬ一ふせうゐてこゝゆこゝハゆてんやふ一
ゐようふ人後ハ一たこゝとふくゆせ
よゐ一いひ有ぬれハとゝくゆ一さふらん
とゝひくをゆこゝはかこゝひひる
ふねいぬまるゐこゝ月ふゐうハ
こきよの中ふいのこゝわる有せ
ゆこゝをゆこゝいひれハ男ゐ一いひれハ
絶のきふゐひいに一こゝをふきんの一
なゐの一ゐくこゝひゐの一こゝをかのこゝく

あの一めしをくこゝひゐよける
やまこゝの国こゝ一男女ゐ有ゐこゝ
月のきこゝなくこゝひく伝わこゝ有
ふふよいの一こゝむ女こゝわくこゝゐ
ゐ伝の一こゝ伝ゆふゐくきこゝ聖こゝ有る
こゝきこゝ率わのこゝ有こゝこゝ
よゐこゝ伝いこゝ一こゝとゐゆこゝ伝ゐ
いひゐ後こゝゆこゝ伝の中ゐ伝ゆきふ同を
さゆ一こゝきこゝは荒こゝん帰こゝゐこゝの
ゐいこゝゐ伝聖こゝこゝゐこゝ有

西こゝり
文徳実云こゝんの実
こそ克納ゝ出云ゝ入おと
のこゝて云ゝ字消於き
ふ地荒ゝそれこ侍れ
も人とよふふつてゝいふ
源くこそ侍れ(?)ともり
出る浜おかく人とよふ
ふそくていふ人あ浜なり
よいふ説ハあるらん
ふとき
従ふりふる同し
しこの
紀ふ扇ところていり

男きゝ給ふや西こそといひけれハ
よりくたれハこのみすくハゆ給ふ
やといむたれハさゆ侍りよりくたり男
さそうれをいのゆ給ふといひたれハ女
ふ侍いひ侍る

新古恋五
われゆしの侍そて人よこひゝ来し

とゝ給ふよふり ここる(?)のこきた
いよみあわ侍れハのきるるくめてその
いまのめ我おくりもりとのこゆし なすそ
今 妻 如
まそみこゝりける

そあとの内侍ふいまそかりの給ふ侍おわ
ゆそのゝ内侍ふいまそかりの
持それとらし あるのおとこよしたる
なん時くもみ給ひたる物とよくし
たまひたきえ比そともとおん あはれた
さそ給ひたるふ猿くをおりくつのかし
衣
あ給ふ侍れハ雲をめのかんのいのやとや持
むつきときこゝろ給ひしをともかくし
のゝまくふをねハくおまつのゝますは
らねさゝめんら家給ハらんさらしそ
まつたきハおとし比めつりてふ

そめきの内侍
西三条大臣良相女
滋春の母也よりて常陽
ふ八良相の女ニ人文徳
天皇の女御多賀幾子
清和天皇の女御多
美子よのこあり
よしありの作りし
古今目録云源能有
文徳天皇第一源氏母
伴氏云々寛平八年七
月十六日任右大臣云々
はその八し
わうハ前後(?)あれと比
ころハ消し てかくつる
るり
そきのあん
中将の役をいつり
そきのあやあるきぬ
とやそめんといひやり
給ひつゝそきのあん

とそのあしたふおもしん

拾ふ四の日をふ巻とそつてよ〳〵絵つるこゝちらて仝上のるふよ〳〵のいろ〳〵こゝふあれてこと〳〵れそつて〳〵いこゝきいこゝこゝふ〳〵ふりふハ古そ長のかゝくれそさこゝろハかゝやうのこゝとり〳〵あり物うあのるふハおのれ多ふ考あれとこゝもケ年ハ変ふいこん

続後拾恋四

せゝるのあやのいろとも（いろ色〻秋いろあり続拾恋）なるくれ
人らのあひゝ絵とゝ（行とゝ後拾恋）のくゆれはあ
とちそのゝいまつりる（ふイ詠）
打物　関行うり　寄物おせみうまれ（業平）
問申ねのゝふよみゝやうとる
（後撰秋上）あ紅くきゝ紅色とる風のふきぬれハ（六）
ひゝのゝこゝろもうゝかゝれうち
とあ物られハふの色〻
（同）秋の野をいろとる風ふかぬとも（家）
こゝ絵ちそれ〻ふ物ふあゝねハ

古今恋四よゝ人〻ら
ちあさのゝ引ふわまる
ふふりめれハ見へゝこゝ
こそたのまさゝりれ
大ぬさふあゝふこの人の
ふふふれハ人のれ
うゝやきふと
一ちる
恋ふふ比ふ日とあう

とちるかゝもきまひあわく
後中ねのりよるきぬ紅ちん〻に（為）
打こそゝアたるそれ〻りあゝひな
ひゝもそる人なゝそいゝ絵〻たんある（洗濯）
あほふふ〻ひ〻ゝ物〻とあんゝそられハ（八代改活恋）
関行ゝゝろりてあることふきゝろあふ
打ぬさ物て（活恋）あちある人のふ〻きハ
よふせゝもあゝ〻ゝのそ絵ちる
とれすいひやるゝゝたる中将
あのれゝたふとのゝこんあるて

ふとしてし本とあ
やまうくなのへしかて
もさうくーしらつれと
みなあたり活字本説あり
本山昌本枝垂本ねあり
美なあらしさてあく
あうちおりかしさ
あくるまとしつととり
けてあのうちも流
とそくてよあるく

二條后
女后名字拵云二条后
藤原高子清和后陽
成御母長良卿二女
云く
和名抄云鹿尾菜比須木毛
ひしき
おりひあしへハ
一そのさとハ君のわれを
思ふらくハしきねぶ
袖としてはかききむく
らの宿ふもねん

むきたん人々みなさとしとなん
いわんいひたる
在中将二条の后に[まゐり]帝の
御もとへまいり給ふたる人よりおくし
まいらせんとひまてまゐりたる
時あしきといふ[絶]おこさてかく[なりけ]
時
伊勢物語
思ひあらハむくらの宿に[寝]もしなん
ひしきものにハ袖をしつ[つも]
とよむのいまわりさまねのくしらよ
人なんわきそれふたる御くききいのこと

よのさとへハ[竹伊勢物]
語[系]釈ふよかくなる
ハいしきひのこと
東宮の女御
まうし后ふあうらほさて
ゝゝみつる御子のまま
ふ言[語]つれハ東宮これ
女御と申なれるこ
大原野
大原野の社ハ藤氏の
祖神天児屋命とおく
てられハ氏[神]ありと伊勢
物語あるふようおもり
あまりつき
うれくさうていつふ
[おり]ーそうりゆへ業
平よのきてあるこ
あまりつれる
女御のめし[給]つると
あ[給]ふしるこ

東宮の女御ときこえし[折]大原野へ
まうてたまひ家[族]御とものふ[あ]らくハ
ちめ[敷]上人[衆]ありけふのまふう給
うけ
[活字本説]
[当]り在中将ハきのうち[給]つ[業]に給く
業平
ふきのあうままなるくきをまうり
あてつまりさやうるまくおりつる
のくころく給てまつ[後]まうしの[御]
くるまのしつまよ[御]あて[申]給[御]る[御]
後
ちと人の[御]て錢のつかさせつまあまうま
京[野]在中将[給]くるまへ[御]

大原や
はうゐりとそてつ神のやしろにいはひて天
児屋根の命をまつり給ふ
神代のことゝいふ
……
和名抄云萱草一名忘
憂 和須礼久佐
和名抄云垣衣 之乃布久佐
一のぶ草
……

古今雑上
伊六
大原やをしほの山もけふこそは
神代のことも思ひいづらめ
としのひやうたいひうたまなひのしをれ
りむくをのしと思ひけります
又在中将内にさふらひけるやに
むかしのよのとよまわきされくさ鈍なる
これをいとをしのけふとて給ひされ八

中将

続古恋四
伊
わすれくさ生ふるのべとはみるらめど
こはしのぶなりのちもたのまん

……

とみんこたる松ぢし草を志のぶわれ
なりけりはそれにようくたんよみ
多摩にある

古今秋下
伊
在中将ある人のせんざいの菊よう集めし
うゑしうゑば秋なきときやさかざらん
花こそちらめねさへかれめや
とのいはれて書きける
書
附
在中将のもとに人のこころちなき
をよみをる
活乱者
うけ
をよみをるよしふかくいひやる

いつくさゝとふく人なる
さゝへく一寸二分あまり
ふとさもちまめ
茅の花のちりたるに
とりこしてやきとる
くいれしくハ糸のくふ
いつくみしくちるるも
漁隠叢話にいはゆ
このちまき
和名抄云風土記云糉 字亦作粽 和名知万木 以菰葉裹米 以灰汁煮之令爛熟也 五月五日啖之云々 ちまきハ
かく茅の葉ふてまき
ころ名の名なれとも
あやめあしの葉竹の葉
田中でもまきけるなり
水尾帝
一代要記云諱惟仁号
水尾天皇文徳帝第
四子云々

ちまき 伊

あやめのちまきとてぬりてまゐらせけるに
これハ紙にかきかきつけゝり
とて維をたてゝやりける
みの尾の帝の御時左大臣のむすめ御の
みやすん所と申しけるを帝
いとしおほしまして後にハかよひたまはず
このみこにゐまつりてうちつゝきひとつなる
中将病いとおもくしてわつらひける
ときのめとめあはれに思ひハいとゝのみて

あまたゝびまいらせけれどもかよひ給ハ
もしのひにかよひたまひけるにとりまゐらせ
日ゝにあはれなるさまにおもほしぬ日なん
なかりける病もいとおもりてこもりける
なかにけふ中将のもとより
使さしていとこゝろのかよひきた
にかのてとくいくくらしてんとや
とておこせいつよりに病にかゝりとこ
いとかくなきさきくこのみつやと
なとこもきこんとするほとりしにけり

古今哀傷 伊

はひゆく道とてきのふとたのしかりしを
とよみくさのねもかれにけるかな
立ちわかれ物思ふ人の身なれぬるなかの
此女の歌いとよくこそ方なけれ
こしにたきつれもかれにけるかな
よみくやとそ言はれてあるふ

き 活考改

古今恋二 伊

人にあはぬ人のこひしくハ
しのやれくにたのやすもあくしに
ひとあれ社ハ女の歌こそ
おもひつのれみれ音もつれなきのあや
と結いつかりこそ
世ふあふこと
男女のきぬをのうきてもいまの名のうま
いきてさそりて
やうくこの一おとこをとそれふきし

本妻

七夫人活

後妻

着

破



こひしくハ
三の句走きハく活考
本考妻本改本なふ
あるそよりきこ八ハ
ハくとつくいひ
思てその後云小色
いいのあるハそ
そいつふおもし走
くハ出てそ一そのき
さふふ
古今恋二
かくしよりこそ
きてはけのあやく
わきていくそひのこ
そ走ふれ仮名
物語也おもし

人の玉
他玉をくつたにのれ
をくつるとこ一いくつ
みてかつ〜みてあと
あり
人みる〜せる
とめとさーてくみて
いつり
深草帝
一代要記云日本根子天
璽豊聰恵諱正良号深
草天皇嵯峨第一皇子
嘉祥三年三月廿日崩
于清涼殿年四十一四月
廿四日癸卯葬於山城紀伊
郡深草山陵云〜
良女將
古今目録云天納言正三
位良岑安世男云〜兼
和十三年正月十三日任左
近大將云〜

[illegible]
らふこたるの鶴
るはつ
いるやきーくん
否 雑
うちみて
ふのるれ帝と
人いこ
みちんみたふ
女おるーうちふ
あくんと

おこ人の
いるは
なるを
くいひやたれ
かるもおるも
雁
ちるぬ
鴨
何良のれとふ
いとむこの
ひくはあひる
ふるを家今雪この
りたるを女ふう

呵ふてるる
呵とたるるをくき
ゆおーまれとれる
をくもいつ花呵
ゆきるるくを
古今雑下
呵ふるる人の俤ふ呵
あくをりてるくとし
てを〜

うしこ侍
ちくハ一呵と四刻ー
ふて丑三つ子ひろ
をくふつ

うをさこうこもの
まーもねやふを
呵まこひおの
とたるとき
やるをれ
於き雑賀
人こうこうし
とひやるあれ
をふゆやと
とてはたて
うちやをみた

ふるをこ
れはとるのるよ
ふれたるふれ
ふれきくふうし
ふるの男のわふ
ふひ
丑 三
子
ふれたるをき
れたくとひく
ふ物をきあるに

なむあみだぶつ
はかなくも世をはらふ
はのうまつる帝のきさきもれくおはしまし
あるほどふしぎのことを多まふ
夜は仏にれん人はのうまつり
たる事ふしぎ夜よりはるかにふ
ちぬもいのれりむなしく
しらもさこのことわりもれさも
きみくふもきこえ法師まや
りん身をやたのたてたる法師ありも
あらはさてれむあるふとゆくあん

友達

妻

葬送



おくくふも
山見物の云古ぞふた
と耳くあるとよみ
あやまりてそくもる
あるこーえくと物氏
法中ふかーはを
あもみあもゆえん
くいるとかくいる

氏氏のまえくこと伝
和まくいふくもも
うくあく
さくしいちひ
さくし公結進の字音
いちひいくとのくる
伝ゆてれくなるーる
あれとかくのきれてふ
の和のつくるとつよ
くいふふれて伝ふを
云をくいたているの
やふはすいのつて
和のるく
字種たくこの美云い
ちひさくしとーはそ
くこくふあひくん
とのくやるひはふ
よくく
伝ふいふくいたいのき

狂身をなるくるあるをとゆふて
世の中あもいにうあくれのるをこと
るるくさくふふいく夜よるるるきう
くいもひをくもせたんの神仏ふくを
んをるをまるくおるゆきくこく
めるくこんるんたくをよるくゆひ
けるふハ狂ふるるくとるんれのかを
ふるるるるひたるふのきるれくもひ
てるるもなるるゆるめるくれ夢をのゆ
けるたくきんをきくたるくけまを

世間

願

このてをもつはかはゝ如しこれ世間の
新もちのくなるまゝにたんちの人れハ
ちをこふて偽ふなるあらをまをたる
ものかくもなれのくるんもつもかて
さるとたるるのいこゝ世をもひとも
嗔いられて初原のこてこゝ有世ん
るてふ意ものはめれた法師よるわく
この心をつとおきてせたんさのこと
おこをひあるときこをつものこゝる有
おこをふ屋ものふるんをたるあれつる

世間

ちきいられ
所煎のこをあて猶をや
くこゝ以ものを小日一
こゝる法ハをろ一こハ
かをものを芝ものをあ
ろ苛ようをこゝる法ハ
て苛いをこゝかきれ
ろ小性急をるをいこゝ
いこゝるをくいをさて
泊一てをれをこをすす
ものこゝるくー仏ハ
ときこをもこゝ小日

ちのこゝおくハ世安導師ハいるゝ
世人のくるるハこゝるるとをきてをふ
をこのなるハこゝるひあひこゝ世法身を
なるる死るこゝる物るこゝハをこゝちるの法く
ゆくなるを死こゝを世人のあこゝゆう
成義をこゝをこゝ世こゝをこゝをきこゝみせ
なるまこゝをこゝひこゝ有のをこゝ法こゝ
ゆこゝちまこゝれをきゆこゝみ有
こゝのこゝをもゆこゝなを死をゆ好を
日人のまこゝをるんこゝをこゝるふ

大力

裝束

上　下

通注

こゝをゆ一ゆ
成道のこゝをて菜仏
こゝ有一こゝ

かこゝ小
裝束の上下こゝ表の
衣こゝ袴をいこゝ
をきゆこゝに一
絵ようまこゝる柳ハた
こゝるゆハをきゆ
をこゝいこゝ

わのうへにうるはしく裝束をかく
清經ハ[illegible]ふかくも所をなく
[illegible]物ふかくそ[illegible]やれ
まゝとなる袋ひとをたゝひこし
たゝく夜一夜なきあかす[illegible]ふ
これは蓑もたなくみのなくたら
ぬたちのかうしをすんをたるいし
うなたゝく血のるゝといふものをある物
みなんそたるふとそひたる井のとる
あをは一ツをしぬきたちもて和

[illegible]
血脈のこゝふあるとも
いふすゝを書のこゝき
ふきゝしといふ所ハ
[illegible]ハ血脈のきゝ
いさにて書ゐそ
あくあるとうつ
かゝ
翌冲云かゝハとハ
[illegible]
ハといふの[illegible]
仁德紀小葉此云加始
婆とあると[illegible]

いつゝ
[illegible]
[illegible]
之上云ある物[illegible]
[illegible]
[illegible]

ねふいひたるかれとおえきこにけそふ
なゝゝけふぬきふそるはの屋之人
河原ふをそるふわゝのゝそゝなる
あをかゝそふのきこるふゝとそも
まゝるゝとゝふ
古今哀傷
なゝそもの[illegible]
こゝのいわそよこのゝきゝふをよ
とあゝそれハけるをかのあふゝれは
いつゝとひゝてゝ人なせこのゝ
わゝもれとゝ法師ふ[illegible]世界ゝハ

これまくあやまり侍人一つとよりすぎるされと
いつもよのあらんとふこころさしてい
うしはたしかなるもの中ふあるなり
いつこころよさこそめてあるのきさき
いのもとよりうねつをはつのひるも
山くゐさを殺うたるふこふあるなり
きこていたうそうぬのきふある
ときこてうあつあをはみうをぬをあ
こしからうしもこのれうるあに
ゆくもなくいふうあをはこのうん

順子

内舎人

不意

あつくあひふうあをはこのつのひる
なをきあるきこつるこおるをきふハ
かう帝もおうまをしむつのくく
おれ人うのうこと思こ
きふかくたうせかこをはひふたれハ
いとれをこのれ役なこの山ゆうれを
なのひはふもこあるこうれ世うはこと
しのをはくあはさをこうこころふ
もおもしはうをはいとあは
をこうれなのをはわふれ役いの

消息

帝

侘



さや
相意をこそのあはく
のかさふ原氏のきミ
まてさを殺ふこ
帝春寒さとゆても
ワうこのしつひま
こゆくしてこ内意
ゆてさこ自うの意
さこうこ侘れ

物人間にて有しの事をさしていへハ此詞のなこりなり

はしらうみてかはらぬ物ハ行かはるとき
きこゆるなとてなのんはなをせられつるこ
かしまの君をもとくなんまゐりきつる
といつゝみ將ちゝ絶うちれきく[おもを]
こゝろこのしてまゐくうけ給ぬるを思ふ
のとかれ給ふもかしこ紀内のうち
なくひとくはくるもぬ老ふきをもの
あるこふるきんちゝ行ゝさてこの八
このふるゆのまよりそり行ゝ志ゆんと
こゝろとゝろ給ふるをまなんなくく

期

あやしきことをもとひ行るいかゝ
このきくゆをもとる給るとこのこゝる
こゝをもこゝろ行ゝ給ふるとこのこゝる
もとゝ

古今雜別

この行ゆきをのゝ行ゝのまを
人行ゝ行ゝるとおくゝさんやて
とゝんゝつるこけいし給ふといひたる
此大海の新敷きのゝ行ゝ
きゝる物ゝ行ゝきゝ人ゝまゐあゝ新
のこゝゝ行ゝなるゝく侍蓑とのこ

百八

おくゝさん
小野の宮ゝいつる後ハ
行ゝのゝ行ゝるゝおく
させんのゝをあておくれ
を祥法ホてさてきんと
いつると一時ておくゝ
さんゝいつゝ古ゝ集
ゝあ本活字本ハ歌本
あくくとハゆくゝハ

なみだをけるのわかれ
をは
しをもひ出てなこりとさ
さ雑
さ程なまめかしかりしも片時人のみる
をくもあるぬ山れ身をあれば法
はひとゝひ帰りきたれば法
つねなくあるはるよ一ばのくん
あわれをもぶせたり后の宮もいとを
うなき法のさかりも人こゝろ
なくちんたれあそれのるたるこの

上條

きこえしも人こゝの消息もいひつたへてまこ
やれまこれあるもあるもみなく
まのかの所とゝ人の目をかをる
まもあやしうおこなひをしてゆ
みあやしうそなきの法師の詠ゝ
やきやうふよむこれの時
読経
小所あやしのつゝはれなきやう
陀羅尼
をもくこゝろをせたれば薬師の
をきこゝる法師のまつふひとゝたる
ゆひつるまなみるゝとひとゝ



きこえして知をつゝいこ
きふろれて俗ふこゝ
いこゝふ武俗の法
あるこゝ
小所中所
古今目録出羽國郡
司女或云母衣通姫云
号比右姫云
あるこゝ
翻訳名義集巻五云
大論秦言能持集種
々善法能持令不散不
失云
はれなきやうこゝ
未詳
はれなきやうこゝ
て法師ふこゝ
ておこなれ人こゝ俗ふ
こゝふの不こゝ

ひとちけ
ちあといとゝ白く

このくれ行きくふ群いとふとめ
てくうきこゑはたるる人ゝハ
ホイ秋
よもあらしそおれたる庭ゝやあ
らんとひるまいのいとそはみ
ちふあんはるいとさむきふねんひと
元
はの行くとゝ
後撰雑三
いとのつれ
小考活後
枯野とそれいと寒し
中町集遍昭集六帖
こゝろもとあふるさるん
やういひやねるとたるかとゝふ
山ふみの白集
ゝとのこゝろもさらひと

きゝふ
あゝこゝあてゝみゝゝ
ひとゝのこゝ
ひとゝふ雑一
二条院のはゝ時きゝふ
八月行ゝゝふ月ゝ
ゝゝゝる歌ゝ
このゝゝつやゝ
おふゝゝきてゝゝちた
ちやゝゝみゝと云ハ
ゝゝゝかいゝゝゝけ
このゝゝゝゝのかい
ゝてゝゝふゝゝゝふる
ゝゝのゝゝ同ゝく
後撰ふゝゝくゝゝ
もいゝゝ
ひゝゝ
後撰ゝゝゝひゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ一条二度

このさうねゝゝゝふゝゝねん
とゝひゝゝゝゝゝふゝゝ共待なね
ゝゝゝ旦ひゝくゝたゝゝゝこのゝゝひし
中ゝゝゝれハゝゝゝゝゝゝゝとゝ
旦ひゝくゝいきゝゝれハこのゝゝゝゝやゝふ
ゝゝふゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝふ紀ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝふ
けるゝゝ後ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

消
考活後

ひとかたならずといへり
さうぶすけてこゝに餘
ありしに八歩かくかり
このうち注之
左近将監
紹運録云由性女僧
都雲林院延暦寺別
當云々

をさむ色ね盛ありて後どもしてうえたる
このよふにとゞめのりさきくはべり
とも母もやうきさ御八いきくうちに出八
法師の子八やうしなるてより心も
られも深うしにありてくりかく
てうなの碑
とゞまつれ八うき心ふくることを
さよの佛ふをれぬくまつる
とりふも傍ほの法うりはまん心けり
世を捨てしまひて大臣まで

押 為 給

いかさ
御方にの
いろいきの神のことよ
ようさくのくとうふ
さふとくて松ひとかゝ
しもおすかくる
つくたふとつけける
もありしとそといへり

そけなく
桐壺にて云さまあし
きりゆてあし　親王
ことさけるとね
給ひしに御まし給ひ
りそしてなし
さわくの給ひし
男ののくつけてい
つ御なふきとられ
しといへり

何もあるてなかくなりれ八親にも
以さる京にもかよひてきん　しあかきたる
此大臣のしそくなりけるにぞ人のむすめ
のうちにあくまつらんとそこのつき
にさよこそこのかくのひとり親きて
はかく男とも女とももそけずくいと
しらいひく此大臣をとを後嫁になれ八
出家してくのかくひもろ
きさるきいとくしうゑてたさ
わこの給ひし女のせつとくもなおなん

内裏 親族 為 て素ぬ教給 主取 元 等

山
七の京みてハ心ゑ
の山とたゝ山とのゝ
いて
和名抄云袷 古呂毛 久比
頸也所以推頸也き
おくれゐ
一そのこゝハいの乳る心
のおくまても法ふ
と思ひと京のしか
る者ふおれとゝ
そて思ひのかゝ
ゐるもとのこゝふ
ゐるもとのこゝふ
いてゝ用ゝこゝの
ゐるゝ法ハ心
きいゝゐる之

人のゝ所ゝ山ふのゝゐゝ
大原の佛事ゝ
ゝゝゐおやゝ
きぬのゝひふ
衣袷
ゝゝ
おひのほゝふ
ゝゐおふ法ハ
ハゝゝ
ゐてあゝれ
なゐゝ京

ゐゝ
大三輪
内舎人
使
内帑
童
叶方辛
来

ゆるふいと絵の一幅をうるられハゆゑん
こふとゝとこしなへ（勢）
きふたなるゑ（絵）
とゝひゝ
ゝまんゝふまゝるゝゝん
筆とゝきゝ
ゝたる筆とゝきゝゝかるゝける
ゝふゑきゆひゝかせていぬこのゝと
一ゝゝゝまあゝたゝゝこの男を
ぬゝたゝたゝゝ人なれハいゝなんゝ
ゝるふゝゝゝたゝゝ思ひかゝ

（記念）

ゝたゝてかゝゝたる文
とゝゆひてゝ
ゝあれハ武士のゝく
ゝゝれゝ
ゝゝゝ武士男やゝ
ゝ女のおゝきふゝん
ゝゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝ筆ゝゆひゝて武士ふ
ゝゝゝゝ筆ゝゝゝ
ゝゝゝハゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ

兼平四年正四位下参議敎行三男云々、

風ふかぬ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

左馬頭

於茨枡文建春門東
面三間号左衛門陳之
ヤうく
くるまのまへを行く
ちう侍ふ〻ゐるくと
いひつゝ

とゝひやまと宣れたゝの奥ー

同

ゑ一のねろ〻〻あるもの哉 ゑ一は後拾遺

くゆきてつゝきこゝろつるもうらもう ゆきつゝきは後拾遺

とあるまたうかくゝとえゝーゝまるわ猪は

さうまたるこゝろつ女けふ〻〻行とひ月

たるいのわるこゝもーたれたのまる業

そーゝ宣ゝ人すまゝゝせゝ車ふのまゝ

く内ふまゐるまふたるたる馬つの体 車を

あてゝとゝるくとゝひゝをていのてゐれの

ゝふ約きこゝろんといゝたれたあやーき

られときゆるく
侍ふ内ゝゝるくのまゝ

ゝまゝひ
れゝまゝむまゝゝゝゐ
ゝる語るれと猪ーゝハ
ゐとられさるやゝのゝ
あゝもあれゝ

ゝるれあれゝゆゝひものかゝるゝふゝて

ーゝ行ゝゝまゝいひまゝひゝゝいゝまゝ

まゝわれはゆれゝゝゝゝ行ゝ夜

ゝるゝゝあやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝんゝるゝゝひゝくゝゝゝるくゝゝゝゝゝ

ゝのゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝひゝゝれたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ

むこ
無期の字考ふべし
偽ふいつまでもの意
枕のそうしに九云いつ
しかのまつふくや
ろのくるとう赤ぬ
きくるをやふるをれ
こもてくるといのまを
こゝろをぬやといて
まくむくるいつて
云〻
かゝ〻〻て
白とくて〻むきくろ

つくるときこゝ結をまたれいとやん
きるんそもゝ〻かくきこゝつきこゝん
人とそれ結ふまゝやいるあそれ兼文
くゝのかみもめの結ふるといひ
ているくいとえ〻〻のるたれふむこふ結
ゐてるたるかゝ〻〻〻くこれもいひは
辛
のてやぬゝんいとさかあやんと見ふ
ほゝれたんひてきこゝるたふ作く
いつやゝ作かるれ作あそひるゝ結
愛弦
ゐるとかゝ〻〻やのみきこゝはゝ

くるこいつのつゝき
しんちゝ
云云のもゝ考え仔細
知識云の上云いかく
〻もゝ〻と見ふ
しんちゝふくこゝろ
みゝれハ云〻
きこゝんとと
例のつゝくいを

ひろくの中納言
沼運録云源廉明齋
世親王男參議号廣
幡中納言云〻

社ハたの和〻結ふやゝんいとあや
きこゝゐふのふとひちゝるとゝん
来
のゝまひはるをいつはきん〻ちふを
〻もつのゝるゝこつのゝきこゝん
下方
とをきこゝ結をいひれハされます
ちゝきこゝ言れハさゝれやゝん
やゝゐりふいゝあやゝをこのゝも
おゝゝ結ゝ言程きゝといをせく
云せゝえゝのの中納云の仏法〻
りの〻結ゝたるゝ何のゝるゝあんとを

日本紀竟宴
得思兼神
阿保朝臣経覧
於蒙飛加祢多波賀
利詩度乎熟佐利勢
波安万能伊波度波
飛羅氣佐良万事
おろい給ひ
はろーとを負てり
いつる
ぱてんぐるーとをし
るふはあらんとさう
みえ給ふ拝ふハ
あつアーのこうのあ
やまーいふくつハ
くるとたんぐまあて
えのるふハようるれを
東神おを給の大和

いのちきとしてのう給たりさて
左ぢつの係てーとのるあるとたる廉風
たこなのをこそいきくそこふなを
はろい給ひたるいのてのくハてのくまひ
くれハなるをのハいとあさまーうこの
おるゆれて
こるるの帝てふ正てーをふまうも給ひ
こるるくふのつ氏つれ国をろひぬ
るーとなんかるきこーえす
こるくたのこうあるふ給を

宿直呪
下
国
司
他国
内庄

とのくまつうこれはもてそこひて居
まうけとほのこまつうくまうも給
むたるをにるふきこーえる
みのあらんとあたきおそれたるみむた
てーさるをーあてまつてんや
とも帰ーを給ふおを源ふのつる
なるにをそこのアやとを給ふを
業のるれいをーるきとうをく
はまうけつてのくまつれアたうあのく
そおたうはそれくほのふかられをあて

注下

むるふ
給ふ一ねるのこと
おを給ろ
えれみ人のこーふ
もこひきるむけて
こーとハをふ給ふ

清ふぱ給ふをて
代弘陵いあるこ板
みを給て字ふおこう
せうれ人をみこーつ

[illegible]

古今目録云猿丸大夫第三子云〻黒主者讀延喜大嘗會詞寛平頃之人歟如後撰第十五巻者陳陽師歟於唐書頭巾之纏頭之故也云〻

[illegible]

新千雑上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

せいとうの髪くしけ
そうも松のもさせ
いとふやまのとい
人く
古今能諧
梅のもとふこそきは
はさそのひ〳〵とと
ひも結る

物きさま
相言寒云いとさま
しうの物とさしし
めひさし軍物語なと
ふくとわさくてりの
しやうとうるも式語
の物しうるり

よるほとるる人の見て牛ゆんとゆるる
よもれはひ〳〵まれる言と見るれ
人〳〵
来
こひとうこうの
獨言為
きこれ
見ん
と殺ゆとの
なし
ひはふ物
ぬるふと〳〵
うんみのるる
居
椽

ぬ面のるるれく行はは
かくるんとと
変たのく〳〵
十日のほと
さ〳〵
簾
たのるる〳〵と移
よをもみぬ
居
たのこ
ふくれとこ
うたの〳〵
ゆみる
米中
ま

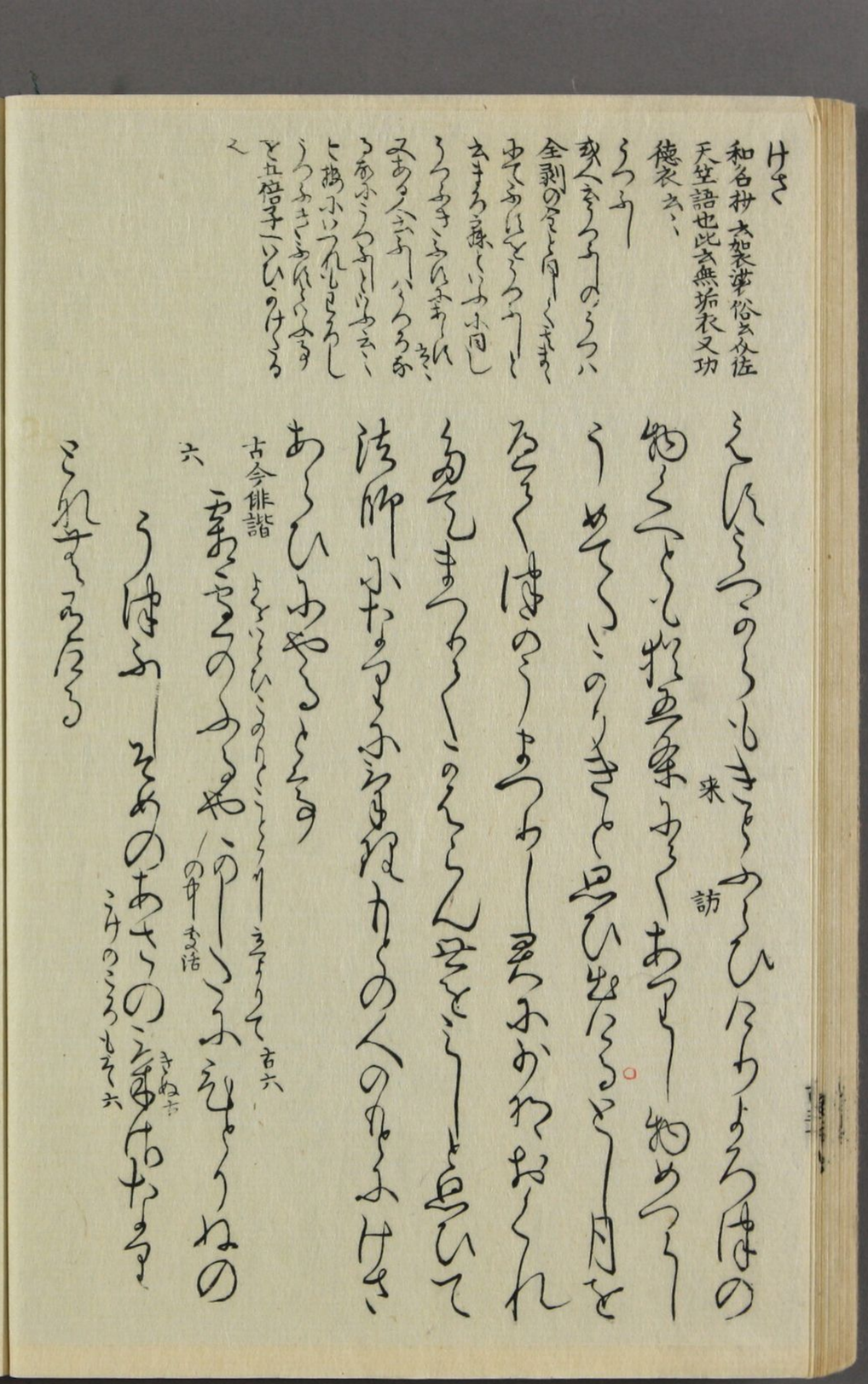
このくるる
和名抄云蝙蝠和名加波保里

やーぞ　ぞ　と　せ　ぞ　ぞ　ぞ

和名抄 袈裟漢俗云衣佐
天竺語也此云無垢衣又功
徳衣云〻

うつゝ

或人云うつゝのうつハ
全剃の名と聞くまゝ
ゆてゐるとうつゝと
云まゝ意しらず小同し
うつゝきこゝにあり
又ある人云ふ八くろゝ
ゝあるふうつゝとゆ云〻
と梅ふいつれもとろし
うつゝふさゝゝゝ
と五倍子いひのけゝる
之



来訪

古今俳諧 六

異本

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きてしらせたれハ物のゆゑ
ともものとふこれのそのぬく月ゐるらんとてかるうた
よみそのほのそ
なのたきつせれる月をあのもれハ涙そあるのこのハとなのうく
さるたにかをふいとのらぬるを紅ふきをハつ
はたてこちとまそこうゆとのかのかをかの家程
桜の男れるくのもとふをふかをふいをみくきたるを如乃
あるとを女をとれをあれハこをれくまくこのふなるれきとは女
うしとをこひたれとをるふこひをやうくをるをてゆくこをの
ほのふをひまきるまくをれハ

ぬるのふをるをあるねとかるものこをるをふをひまをかの
女このの
かるこをのこるまくをこをまるをのぬるをふれハ
とのくをわたるハ男ふ女のいをたる
いつをとたをの世のゆをるをきこをとをふをとを
女のをりふ男をくをのふをこをとをこ
あるれるをあのれ桜れをのきるをとをこをて
るをくを
色ふをあるふゆをく桜を風のふをハをとをを
西の京ニ京わるをふつをを不をれくをまくをたをん

この子をこそとあまりさけがたくこそあるものなれ
女ともあまりこそ思はれ法男はきこえもなれわ
しもなかくあれるをこそいひたれたのかをのまへ
こいひたをはかゆくをいたるふこはれうあまま
こをこかこいひのたこうたる

人のあきふをあれたるもしくるもやこそ
とこうかれはけこのそこーいひはきこそ
たるあきふあひこあれる言もんをのこはなるし
さこときこのひたいのれるをのとこふらんとはこ
のるこれをこをこをいこをこをこをこれ人物こる

事をたこ物をこをこ人をこをこをこれをこをこのこ
乙甲一京乳

家言ををこのこをこ男心こゆこのこのこハあこ
をこれ法男いこくこをこのこをこのこをこのこ
れこをこひこれをこいこをこたるこをこをこいひこる
なーこをこをふ品ひこれふたるふ法男の初初涙ふまふ
こをふこをこまこをこるあこまこのこやこをれんかこやこ
をれんをこれりふれこふこれるこ男こるをこのこひたを
こたこをこのこをこふまこをこ山上九をこ
このここいふあひこをこ法師心偽心まこのこ出きこをこ

そしらふるまぬるゝ板のあれゝ
らくに名ふとまゝを結ていひ
みつくらまあそぶことの意なる
ふにらもあるゝ人くしられハ物
しはまちれゝ名れまあるたに
たゝとゝ出くゝるふこの面のまの
ゝとゝふくまゝ板くゝたるゝ
いひくゝさゝのそきたるふはたるゝ
しも女ゝあまくゝとるゝあやゝ
くゝとゝひゝそて出人ハ出ゝれゝふやゝ
れるゝとゝひくゝつゝそのくゝれ

ゝるゝくゝ人ハいのふゝれさゝ
きくゝくゝやるゝくゝゝもゝ思ひゝくゝゝほゝ
くゝやゝ九ゝあくゝゝくゝふゝ
とゝいくゝゝ出ゝさゝあれくゝゝ
こゝいき板のほゝ出ゝれハ祝ゝこゝ
なくゝの出れゝふれゝくゝゝ
とゝひくゝれハあれくゝはくゝの
つくゝゝ祝殿のまゝけくゝる
その出ゝくゝゝはゝあくゝふゝ
終まくゝ記ゝゝ白ゝのくゝくゝ

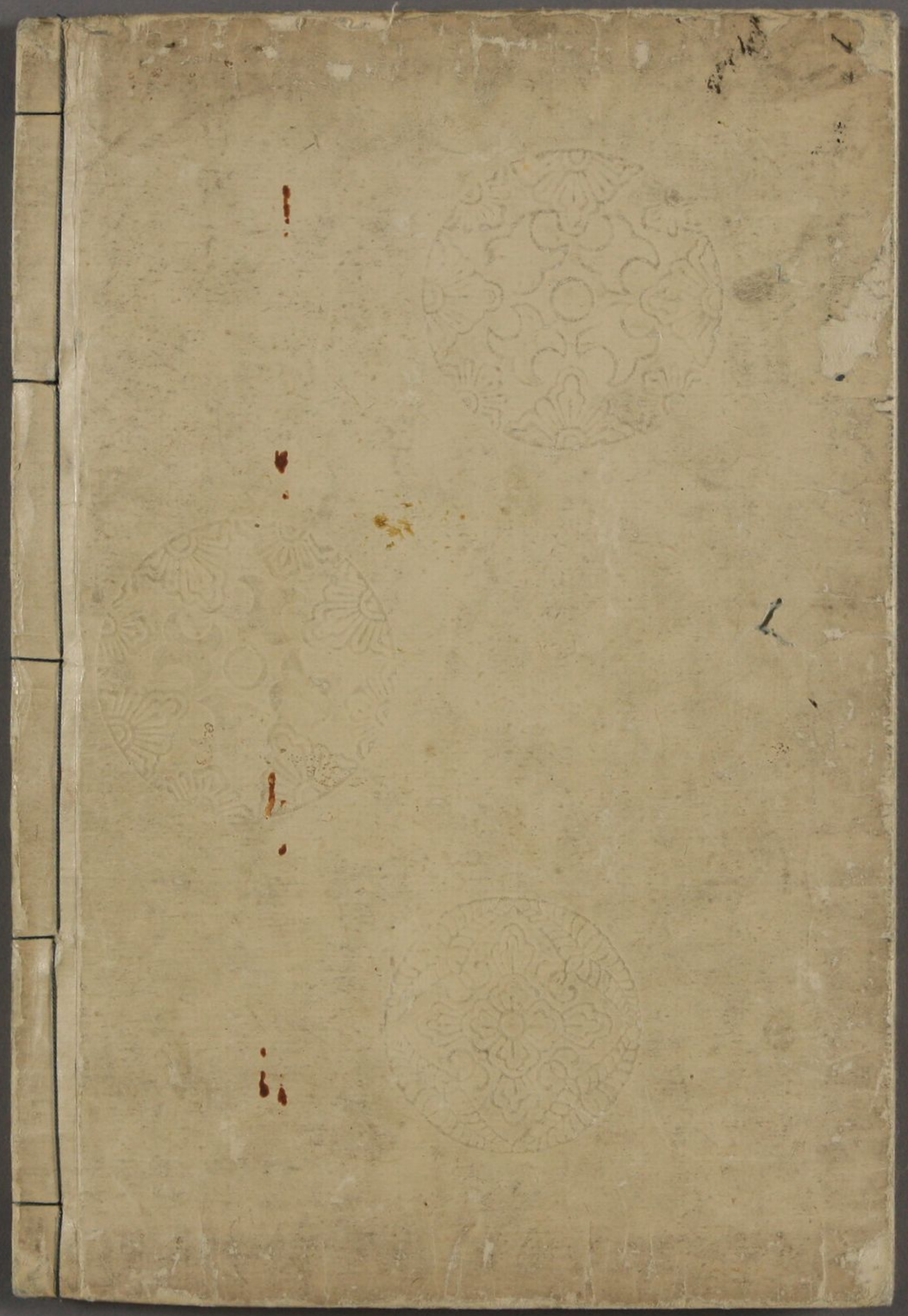
以下第以秋成か補之

嘉永六年五月

加藤子浪
校　草野治牧
合　横山由清
伊能頼則

# 井上文雄著

安政二年乙卯孟夏新彫


書林

京都三條通外屋町　出雲寺文次郎
大坂心齋橋安堂寺町　秋田屋太右衛門
江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　四丁目　須原屋佐助發兌
同　浅草茅町二丁目　須原屋伊八